

高等学校における親準備性を高める教育プログラムの開発 —子育てにおける葛藤を題材として—

Development of a Teaching Program to Enhance Readiness for Parent in High School -Dealing with Difficulty of Child Care-

福嶋 俊

NPO 法人企業教育研究会

近年、虐待相談件数の増加や母親の社会的孤立や、家庭の養育機能の低下など、様々な面から子育ての難しさへの指摘がなされている。そこで本研究では、これから子育てをしていく高校生が、将来子育てに責任をもち、積極的に子育てに向かえる力を育成することを目的として、教育プログラムを開発し実践を行った。結果、恋愛過程を描くことが子育てについて考える導入として用いることと、高校生女子にとっては実際の母親の声を聞くことが有用である、という2点が示唆された。一方で、男子高校生の子育てへの関心をいかに喚起するのか、そのための教材はどうあるべきか、子育ての問題に対して現実感をもって考えられる教材とは何か、という3点が課題としてあがった。

キーワード：子育て、親準備性、家庭科教育、保健・体育科教育、虐待予防

1. 研究の背景と目的

1.1. 子育ては難しくなっているのか

子ども・家族の暮らしは厳しくなり、保育・子育ては激動の時代を迎えている（浅井・丸山 2009）。「待機児童問題」や「公立保育園の民営化問題」のような子育てをめぐる制度的な問題をはじめ、「虐待相談件数の増加」や「母親の社会的孤立」¹など、様々なトピックで子育ての問題が論じられている。

なぜ、子育ての問題に注目が集まり、子育て支援の重要性が叫ばれているのか。その理由の一つとして、最悪の場合、虐待などによって子どもが死に至ることが考えられる。

厚生労働省（2011）²によれば、児童相談所への虐待相談件数は、平成22年度の速報値で55,152件と、統計を開始した平成2年以降、最多となっている。この背景には、2000年に児童虐待防止等に関する法律が制定され、さらに2004年の同法の改正などによって、虐待への認知度が高まったことが考えられる。それゆえ、「児童相談所への虐待相談件数の増加は純粋に虐待の増加を意味するわけではないが、児童相談所に通告されるものは氷山の一角に過ぎない」（後藤 2011）と言われることも多く、養育に困難を抱える家庭は数字に現れている数字以上に多いと考えられる。

では現在の社会は、子育てが困難な社会なのだろうか。

広田（2001）は、「様々な教育言説の歴史を概観した著書の中で、1910年から1920年の大正期にかけて、都市の新中産階級を中核として子どもを意図的・組織的な教育の対象とみなす親が広範的に登場してきた」と述べ、それを「教育する家族」と定義している。

それ以前の社会は貧しく、子どもは労働力を補う存在として扱われていた。そのため、家庭における教育の優先順位は高くはなかった。また、子どものしつけや人間形成機能に関しては、子どもの同年齢集団や親戚、地域の人などを含めた大きなネットワークが担っていた。

ところが、男性が労働を担い、女性が家事を担うという性的役割分業が進んだ結果、子育ての責任が家庭に組み込まれ、一定以上の所得をもつ階層において、「教育する家族」という、子育ての責任を外部に依存しない家庭が登場してきたのである。

1960年代以降、「教育する家族」は、学歴取得への関心の増加と、親子関係の変化³によって、あらゆる階層へ広がっていった」（広田 2001）。実際、「教育ママ」という言葉が、1950年代後半から60年代にかけて日本のジャーナリズムに登場して流行語となり、その特徴や問題点が様々に論じられた」（本田 2000）ということも指摘されている。高度経済成長期以降、専業主婦家庭モデルが高所得層だけでなく一般階層の家庭にも普及する中で、家庭の中で子育てが重要な位置を占めるようになり、家庭での教育熱は高まっていったのである。

それまで子育ては、兄弟姉妹、親戚のような集団や地域の人など、様々なアクターによって行われ、その責任は分散されていた。ところが、「子どもの教育機能が家庭に組み込まれていく中で、子どもの教育に関する最終的な責任を家族という単位が一身に引き受けざるを得なくなっている」(広田 1999) のである。子育てが難しいというよりは、家庭が子育ての責任を背負う時代となったと言えるだろう。

それでも、女性が子育てに専念できるのであれば良いかもしれない。しかし、最近では、女性の社会進出が進み、子育てだけでなく社会における役割獲得をめざす女性が増加してきている。そのような社会環境の変化の中で、以前とは子育ての難しさは変化してきている。広田 (1999) は、「現代では以前よりはるかに多くの母親が、パーフェクト・マザーを目指すようになった」と指摘するが、職業的自立と同時に子育てでの成功も求められるところにも、現代社会での子育ての難しさがある。

1.2. 子育て支援の実際と親準備性を育む教育

上記の背景のもとに、日本では様々な子育て支援の取り組みがなされている。例えば、保健所では 2009 年から「こんにちは赤ちゃん事業」⁴を開始し、生後4か月までの乳児のいるすべての家庭を訪問し、様々な不安や悩みを聞き、子育て支援に関する情報提供等を行うとともに、親子の心身の状況や養育環境等の把握や助言を行い、支援が必要な家庭に対しては適切なサービスを提供できるような取り組みを行なっている。

しかし、虐待予防の分野で「早期発見から早期介入」と同等かそれ以上に、「子どもの虐待防止」の視点が重要になる(中根 2007) というように、子育て環境の変化に適応できる母親・父親を育成していくためには、子どもをもった親の支援だけでなく、これから子どもをもつ青年期の親準備性を育む必要があるだろう。

親準備性の育成という観点から子育てに関する技術や知識を獲得していく営みは、日本の学校においては家庭科の保育教育や保健科の性教育の延長線上で行われてきた。

例えば、家庭科の保育学習の学習指導要領においては「幼児との触れ合いや関わり方の工夫ができること」のように親になるための教育の必要性が述べられている。しかし、それらに関しては、十分な指導が行われているとは言いがたい(伊藤 2007) ということも指摘されている。

他方、海外においては以前から青年期対象のペアレンディングプログラム⁵が開発されており、FACSやRoots of Family、Learning How to Care など、様々なプログラムが実際に展開されている(伊藤 2007)。これらのプログラムでは、クラスで親子訪問を行ったり、他者への共感の姿勢を発達させることを通じて親準備性を養ったりと、様々な取り組みが行われている。

日本においてはペアレンディングプログラムに関する調査研究や親準備性の尺度開発(伊藤 2007)や調査などの実態調査研究(中嶋など 2001)は進んでいるものの、子育て準備に関する実践研究は進んでいないのが現状である。

1.3. 親準備性を育む教育の先行研究

次に、親準備性を育む教育プログラム開発における先行研究を見ていく。川崎(2008)は、中学生を対象に次世代育成という観点から親準備性を高める教育プログラムを開発しその評価を行った。そこでは、次世代育成能力を、①次世代とかがかわれるコミュニケーション能力、②次世代の成長過程に関わる知識、③次世代と積極的に関わろうとする意欲と定義し、親子交流や企業の人材育成に関する講義などを通して次世代育成能力の育成に取り組んでいる。

その実践を質的に調査し、中学生が親子とのふれあいなどを通して次世代育成への意識が高まったことを明らかにしている。

川崎の研究では中学生を対象に実践が行われ、その評価も行われているが、高等学校において行われた実践的研究はない。しかし、高校段階において、子育てはより切実な問題となりうる。

高等学校での実践事例としては、保育体験学習がある。吉川(2011)は、高校生が保育園にいき、遊びを通じて幼児と触れ合うことで、保育者としての視点を得たことを指摘している。しかし、ここで述べられているのは子どもとの関わりに対する高校生の変化であり、親になるということに焦点が当てられているわけではない。

確かに保育体験によって子どもと接することの抵抗感はなくなるかもしれない。実際、池田(2008)は、中学や高等学校段階で育児体験をすることが親準備性に重要であることを指摘しているし、吉川の実践もそうした背景のもとに行われている。しかし、実際に重要となるのは親の立場にたつてものごとを考慮する経験だろう。

近年は、インターネットの普及によって地域のコミュニティが機能しておらず、子育て環境が不安定だと指摘されている。とすると、単に子どもとうまく接せられる能力だけでなく、厳しい子育ての環境の中でもその解決方法について考えを巡らせるような能力が、親準備性として必要となるだろう。

2. 研究の目的と方法

本研究では現在の子育ての環境について改めて調査をした上で、高等学校における親準備性教育のプログラムを検討していく。その上で、高校生を対象とした親準備性を育む教育プログラムを開発し、実施する。

授業中の子どもたちの様子や意見、教員の意見などか

ら、本プログラムが、高校生が親の立場となって子育てを考えるのに有効であるかどうかを検証していく。

3. 授業・教材の開発

授業・教材の開発は、現代の子育てにおける問題点を整理するため、①筆者らが定期開催している研究会⁶において子育てに関する最新事情を理解し、②それをベースとして教材開発をした後に、③ママサークル⁷の母親達に内容の正当性を検証してもらうという流れで行った。

3.1. 研究会の概要

2回の研究会では、講師を招いて以下のテーマで話を聞いた。表1に研究会の内容と講師を示す。

表1 研究会の内容

時期	内容と講師
10月	「育児雑誌から見た親子関係」 『AERA with Baby』編集長：猪熊弘子さん
11月	「母親の社会的孤立防止としてのギャルママサークルの存在」 『ROMANTIC MOTHERS STYLE』代表：新津幸さん

「育児雑誌から見た親子関係」をテーマとした研究会では、メディアから見て現代の育児の特徴を話してもらい、参加者とともに議論していった。

そこでは、育児の「常識」は数年で変わるという話があげられた。例えば、15年前くらいは、赤ちゃんが風呂に入った後湯冷ましを与えるとされていたが、現在は母乳だけでよいとされており、実際に雑誌に「おばあちゃんが湯冷ましを与えて困る」という相談があったという話がでてきた。近年「孤育て」という言葉がクローズアップされ、地域のネットワークなどがなく子育てをすることが問題視されているが世代間で育児の常識に差があるとすれば、世代を超えて交流しにくいということも考えられる。そういった世代間の壁を、育児の教育においては考えていく必要があるだろう。

また、育児に積極的でなく世話にも手のかかる父親を「名誉長男」と呼ぶなどの話があげられた。いかに父親の育児への参加を促すかは重要なテーマである。父親は子育てを手伝うというスタンスであることも多いが、より主体的に子育てに関わることが求められているということは教材作成の上でも論点になるだろうと考えられる。

「母親の社会的孤立防止としてのギャルママサークルの存在」をテーマとした研究会では、『ロマンティック・マザーズ・スタイル（以下：ロマスタ）』⁸というギャルママサークルの代表である新津さんをゲストとし

て招いて話を聞いた。ロマスタでは、ギャルママと呼ばれる母親が古民家に集まり、共同で農作物を育てたり、同じく母親向けのイベントを企画したりと共同して事業に取り組んでいく過程を聞くことで、ギャルママたちの子育ての実情を把握していった。

例えば、ロマスタでは「マイナスを押し上げる支援じゃなく、子育て自体を楽しむプラスの支援を行なっていく」ことをテーマとして、0-3歳の子どもの生活週間は完全に母親が握っているという問題意識をもとに、母親たちが共同で食育支援に取り組んだり、家に引きこもっている母親を引っ張り出すためにイベントを企画したりしている。ネットワークを使って子育てを楽しく行なっていこうとしているのである。

その背景には、講演者の新津が、子育てしはじめのころは子育て仲間がいなくて苦労したことがあるらしい。一人で子育てをしていると情報がない。予防接種はどこかの病院がいいのか、図書館の読み聞かせはいつやっているのか、そういった情報が入ってこないのでは外にも出られない。だから仲間もできないという悪循環に新津は巻き込まれていたと語っているが、ネットワークの欠如が子育ての苦しさにつながることをここでは確認した。

2回の研究会では、様々な論点があがった。中でも、現代の子育てにおける課題として、子育ての常識の世代間の差、父親の子育てへの参加の難しさ、母親の社会的孤立などが実際の子育ての場面において問題となりうるという示唆を得た。

3.2. 教材の作成

研究会で把握した現代の子育ての実情をもとに、その実情を高校生にも理解してもらえるよう、子育てにおける困難さを描いたケースを作成した。

教材の作成においては、前述した研究会で明らかになった子育てで起こりうる問題に加え、母親へのインタビューを通じてわかった子育てへの意識や、インターネット上で共有されている子育ての悩み相談の内容をもとにケースを作成した。

プロトタイプを作成して実践校の教諭などから意見をもらったところ、高校生にとって長文を読むことの難しさが指摘された。そのため、高校生にも読みやすいという観点から、ケータイ小説のような文体でケースを作成した。

本教材の登場人物は、莉奈と悟という夫婦と、2児（サヤカ4歳、タツヤ2歳）である。専業主婦で子育てに専念している莉奈が、日々の生活を振り返って子育てにおける葛藤を語るという構成でできている。子育てにおいては女性に負担がかかりやすいということを考慮し、女性が子育てにおいてどのような葛藤をしているのかを考えていくこととした。以下、本教材の設定と特徴を確認していく。

莉奈の両親は遠方に住んでいるためなかなか会うこ

とができない。夫の両親は車で片道2時間程度の距離にいるものの、すぐには会いにいける距離ではなく、夫の両親ということもあり若干の遠慮がある。家族を含め、地域のネットワークが活用できれば悩みを解決しながら子育てができる。一方、ギャルママサークルのように子育ての悩みを共有できる場がない時に子育てに苦勞する様子を示すためにこのような設定とした。

莉奈は子育てに専念しているのだが、その生活に疲れ始めている。教材の文章にはこのような表記がでてくる。

ふと考え事をしていたら、上の子サヤカが泣き出した。タツヤが生まれてから、サヤカは赤ちゃんがえりがはげしい。今日も、自分でゴハンを食べられるのに、「あーんして！」と言ったり、わざとこぼしたりして、私を困らせる。

その理由は、2歳になる長男タツヤが生まれて手間がかかり、サヤカが赤ちゃん返りをし、余計に手間がかかることにある。ご飯を食べさせようと思ってもうまくいかず、夜泣きも激しく睡眠不足になっているため、イライラが募っているという設定である

そのため、夫の悟に対してもいらいらをぶつけることが多く、月に一度の飲み会に参加する夫にも不満を感じてしまう。

「莉奈？ごめん、今日飲み会がはいっちゃった。遅くなるよ。」「え、また？もういいかげんにしてよ！」楽しそうにお酒を飲んでいる、悟のことを考えたら、いらいらが限界に達した。

そこで、この言葉のように夫に対しても不満をぶつけている。とは言え、夫は育児には積極的ではある。例えば、普段は朝7時から夜11時くらいまで働いている夫だが、休日には家事をしたり子どもと遊んだりと精一杯子育てに励んでいる。夫が子育てをしないというケースであれば、子育ての葛藤と言うよりは男女間の問題がクローズアップされてしまう。そこで、夫は積極的に育児に参加していることを強調した。

また、子育てに専念するというにはある意味女性としての楽しみやキャリアを一旦捨てるということでもある。このように、同世代の女性が自分の人生を楽しんでいることに対する葛藤も描いている。

月1でやっていた女子会は今でも集まってやっているらしい。ふりかえてみると、自分のためだけに使う時間なんて、ほとんどない。これでほんとによかったのかな？

以上のように、起こりうる問題点を散りばめて、いくつかの問題点に気がつき、その問題について考えられるよう教材を作成した。

3.3. 導入教材の作成

本教材は、生徒にも子育てにおける葛藤を理解してもらうことを目的としているが、高校生にとっては、子育て自体のイメージが湧きにくく、当事者意識がもちにく

いと考えられる。そこで、ケースの状況を理解するための伏線を貼ることが必要だと考えた。

そういった背景をもとに、この教材に登場する二人が高校生の時に恋愛している姿を描いた映像を制作した。ここでは、莉奈と悟が高校時代に恋愛をし、就職した後に結婚し、出産・妊娠するまでの過程を描いた。

本教材は、ケースを読む前に導入段階で使用するためのもので4分30秒の長さである。

3.4. 子育てをしている母親の授業への参加

授業で教材を扱う上で、実際に子育てをしている母親からの視点が重要だと考えられた。そこで、筆者の知り合いである母親Nさんにゲストとして授業にきてもらい、本ケースを読んだ母親目線での意見と、子育てをする実感について話してもらうこととした。

Nさんは1歳の子どもをもつ母親である。大学卒業後に仕事をしてきたが結婚と出産を機に退職し現在は子育てに専念している。研究会では、世代の差があると子育ての常識が変わることが指摘された。子どもを産んで1年で現在も子育てをしている20代のNさんであれば、高校生との年齢も近く共感を得やすいと考え、Nさんをゲスト講師とした招くこととした。

4. 授業の概要・考察

4.1. 授業のねらい

本授業のねらいは、単に育児に対する興味関心を抱くだけでなく、自分が育児をする時のことを想像して実際の自分の将来と照らし合わせながら子育ての現実的な課題を知ることである。

4.2. 授業の実施の実際

本授業は、1時間展開で行った。対象者は、千葉県内の高等学校1年生のあるクラス26名(男子13名・女子13名)である。本学校は農業や園芸を学ぶ学科と商業や情報を学ぶ学科の2つで構成されている。卒業後は大学に進学する生徒もいるが、専門学校に進学したり就職したりする生徒が多い学校である。

授業は筆者が行い、ゲストとして子育てをしている母親であるNさんを招いて教室にて行った。

4.3. 授業プログラム

授業の流れを表2に示す。

表2 授業の流れ

時配	内容
5	授業の概要説明
5	ドラマ視聴
10	子育てのケースを読む

10	ケースの内容理解
15	ケースに関するディスカッション
2	母親からのメッセージ
3	まとめ・感想用紙記入

授業ではまず、本授業の概要を説明し、「将来自分が子育てをする時のことを考える時間にしてください」と伝えた。

本テーマを考えるために、ある高校生が主人公の恋愛ドラマを見てもらい、その後二人が結婚して子どもを産んだ4年後の子育てをしている姿を描いたケースを読んでもらった。

読んだ上で、①二人が抱えている問題についてグループで話し合い何が問題なのかを共有し、②二人が抱えている問題を解決するためにどうすれば良いのかを話しあった。

上記の話し合いの結果についてはグループで意見をだしてもらい、その意見についてゲストのN氏にコメントをもらいながら授業を進めていき、最後に子育てをしている母親からのメッセージをもらった。

4.4. 授業プログラムの考察

授業中の子どもの様子と、感想用紙の記述から本実践を考察していく。

文章を読んで気になった部分にマーカーを引いてもらった。その部分を発表してもらったところ、「結婚した時のイメージと違う」「飲み会が入って帰りが遅くなるというが、きちんと連絡する必要がある。」などの意見がでてきた。そのことに関してNさんからは「わかっているのだけどもいららすことはある」という意見がだされた。

また、「これで良かったのかな」という部分がきになったという意見もあり、結婚するという決断自体に疑問を感じている子どももいた。ちなみに、Nさんの話の際、それまでざわついていた教室が静かになり、子どもたちの視線はNさんに注がれ、中でも女子はNさんを注視していた。

その後、二人はどうすれば良いのかに話が移ると、ある男子生徒から「離婚すれば良いのではないか?」というコメントがだされた。それに対してある女子生徒からは「離婚したら全て終わり。子どもはどうすれば良いのか」という問題提起がなされ、議論になった。

男女別々のグループで考えていったが、男女による意識の差があったために議論になったのだろうと考えられる。

次に感想用紙のコメントをもとに分析していく。26人中12人の記述に、子育ては「大変」だと感じるという記述がある。「大変」ともに「難しい」という記述も併記してある記述も多い。例えば、ある男子生徒からは「とりあえずわかったことは結婚とその後が大変だと

いうこと。男からすれば嫁が辛い思いをしていることがあること。」とのコメントがあった。今回の教材は子育てにおける負担を描いている。なので、この教材を読んで負担に感じた子どもが多かったのだろうと予想される。

一方で1人が育児は大切だと記述し、それに関連するコメントがいくつか見られた。ある女性生徒からは「女はやっぱ大変なんだと改めて実感した。だけど自分の子どもを早く欲しいという気持ちは全く変わりませんでした。できれば早く産みたいです。」という記述が、別の女子生徒からは「子どもを育てるのは二人で支えながらじゃないといけないと思った。」という記述が見られた。これらのコメントのように、前述した男子生徒のコメントと同様、育児の大変さを踏まえた上で、自分の希望を明確に表示しているケースも見られた。

実践校の教諭に意見をもらったところ、教材の質に関する話があげられた。今回は導入教材をとりいれたり、教材をもちいたりして育児について考えられるような工夫をしていたが、教材自体が面白ければ子どもは授業に食いつくと教諭からは指摘を受けた。

5. 成果と課題

本研究の成果としては、①育児の困難さを描いた教材で男女ともに育児の大変さに共感できたこと、②高校生女子にとっては実際の母親の声を聞くことが現実感を持っているということが分かったという2点があげられる。男女ともに育児の大変さには共感していたが、Nさんの話の際に女子生徒が注視をしていたように、女子生徒にとっての子育てをしているお母さんの声は新鮮にうつるということは明らかになった。

一方で課題としては、①男子高校生の子育てへの興味をいかに喚起するか、②そもそも自分たちとは関係がなさそうに見える子育ての問題に対していかに現実的に考えられるか、③一つのケースを読むことで子育てに関する意識が固定化する恐れがあるという3点があげられる。

近年はイクメンという言葉が流行するように、子育てをする父親は珍しくはなくなったものの、高校生に対する本実践を鑑みると男子と女子の子育てに対する意識の差は明確に現れていた。男子が当事者意識をもって子育てについて考え、子育てに対する意識をもてるかは今後検討していく必要がある。

そのような工夫をした上で、高校生が育児の問題を考える際に適切な教材は何か、という課題に対する答えは出さねばならない。高校生にとって、育児は遠い世界に感じるものである一方で、10代で妊娠する子どもは一定数以上おり、若くして母親・父親になる人もいる。高校の雰囲気や、生徒の様子など様々な要因によって求められる教材像は異なるだろうが、学校の現状を踏まえた

上でいかに生徒が共感できる教材開発を行えるかが今後の研究の課題である。

また、本教材では育児の大変さを強調したが、一方で育児を楽しんで積極的に行なっている人も多い。今回の教材を読んで子育ては大変だと回答した子どもが多かったが、一つの教材を読むことで子育てへの意識が固定化していく恐れがあるため、教材作成において正の側面と負の側面をどのようなバランスで扱っていくかは今後検討していく必要があると考えられる。

子どもの貧困白書編集委員会編(2009)『子どもの貧困白書』、明石書店
 滝山桂子・斎藤一枝(1997)「中学生・高校生・大学生の親準備性の実状―秋田県における調査から―」、秋田大学教育学部研究紀要教育科学 52、pp39-46
 佐々木綾子(2007)「親性準備性尺度の信頼性・妥当性の検討」、福井大学医学部研究雑誌 8(1/2)、pp41-50
 川瀬隆千(2010)「大学生の親準備性に関する研究」、宮崎公立大学人文学部紀要 17(1)、pp.29-40

¹ 2011年2月5日、NHK特報首都圏では「産後4か月間・母親の孤立を救え」とのテーマで、母親の社会的孤立に関する特集が組まれた。

² 厚生労働省は、平成23年7月22日に「子ども虐待による死亡事例等の検証結果(第7次報告概要)及び児童虐待相談対応件数等」を発表している。なお、ここでの数値は、宮城県・福島県・仙台市の数字を除いたものである。

³ 広田は、中産階級の過程で父親は外で生産労働、母親は家で家事・育児への専念という性別役割分業の一貫の「子どもの世話や教育」が見込まれていったと指摘している。

⁴ 「こんにちは赤ちゃん事業」厚生労働省ホームページ
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/kosodate12/01.html>

⁵ 海外での親準備性を高める教育はペアレンティングプログラムと呼ばれることが多いが、子育て準備教育と同義である。

⁶ 筆者らは、日本メディアリテラシー教育推進機構・NPO法人企業教育研究会とでメディアリテラシー教育研究会を月に一度開催している。

⁷ 千葉県千葉市で活動している母親サークル「ちば子ども学研究会」に参加する母親に授業の概要を説明し、教材を見せた上で教材に対する意見をもらった。

⁸ 山梨の南アルプス市で活動するいわゆるギャルママサークル。2007年から活動していて様々な母親向けイベントを開催したりしている。120名ほどの会員がおり、県内でも有名な団体の一つである。

引用文献

浅井春夫・丸山美和子(2009)『子ども・家族の実態と子育て支援-保育ニーズをどう捉えるか』、新日本出版社

田中理絵(2011)「社会問題としての児童虐待-子ども家族への監視管理の強化-」、教育社会学研究 第88集、pp.119-138

後藤啓二(2011)『法律家書いた子どもを虐待から守る本』、中央経済社

広田照幸(2001)『教育言説の歴史社会学』、名古屋大学出版会

広田照幸(1999)『日本人のしつけは衰退したか「教育する家族」のゆくえ』、講談社現代新書

本田由紀(2000)『『教育ママ』の存立事情』藤崎宏子編『親と子-交錯するライフコース』、ミネルヴァ書房、pp.159-182

池田かよ子・西脇友子(2008)「青年期女子の母性準備性について-家庭環境、友人関係、結婚観及び出産感との関連について-」

中根成寿(2007)「虐待は障害のリスクか?―児童虐待と発達障害の関係について―」、福祉社会研究 8、p.39

伊藤葉子(2007)「アメリカにおける中・高校生を対象としたペアレンディングプログラムの検討」、千葉大学教育学部研究紀要第55巻、pp.145-151

中嶋律子・北川真理子・小笠原昭彦・神田真愛・上松みほ・安藤えみ・鈴木理美子・中野あゆみ・長谷川綾・近藤晴子(2001)「高校生・大学生の親に鳴ることへの意識調査」、名古屋市立大学看護学部紀要第一巻、p.93-99

川崎雅子(2008)「親世代になるための準備教育の授業開発」、千葉大学授業実践開発研究室紀要第一巻、pp.13-22